

## 音事象の記憶化と認識の度合いについての研究

00101 畠山 拓也

### 1, はじめに

音は受動的に自然と耳に入ってくることが多く、私たちはその中で、それらの音事象を漠然と印象評価している。しかし、従来の音環境調査において音事象の種類を記録し、それらの音事象や音環境全体に対する印象評価を調べるような研究では、音事象の記録は、被験者に積極的に音事象を見つけようとさせることによって行われているため、普段の生活における音がなんとなく耳に入ってくるような状況とは音を聞く態度が大きく違ってしまっている。よって本研究では、積極的に音事象を見つけようとするだけでなく、漠然と聞こえていたであろう音事象を記憶として導き出すことで、音事象に対する認識の度合いの違いを調べ、また音事象それぞれに対する印象評価と音環境全体に対する印象評価の関係を認識の度合いごとに考えたいと思う。

### 2, 音事象の分類

音事象を記憶と認識の度合いから分類する(表1)

表1 音事象の分類(認識レベル)

積極的に聞こうとしなくても認識し記憶される音事象
積極的に聞こうとしなくても認識はするが記憶はされない音事象
積極的に聞こうとしないと認識されない音事象
背景音(積極的に聞こうとしても認識できない音事象)

記述調査ではレベルが同次元で抽出されてしまう。本研究では記憶アンケートと記述調査を2つ行うことで、抽出される音事象を認識レベルとして分類化し、レベルごとにそれぞれの音環境について考える。またの背景音は、記述調査でも抽出できないため今回の研究では無視する。

### 3, 実験の概要

#### 3-1, 記憶アンケート実験

被験者(20歳代の男女、各場所に5人ずつ)に10分間対象場所(下北沢の住宅地、商店街、駒場野公園の3カ所)に待機してもらい、その後別の場所へ移動してどのような音事象があったのかを、記述シートの音事象欄に記入させ(これがレベル)またそれぞれの音事象・音環境全体に対しての5段階のSD法による印象評価(表2)をしてもらう。

#### 3-2, 記述調査実験

再度、対象場所にて10分間の音事象記述調査を行い、同様にそれぞれの音事象・音環境全体に対しての印象評価をってもらう。

この際、記述してもらった音事象のうち、先の記憶アンケート実験では認識せず、

表2 形容詞尺度

・日常的な	・非日常的な
・活動的な	・落ち着いた
・静かな	・うるさい
・こちよい	・耳障りな
・いい	・よくない

今回の調査において初めて認識したと思われるものはチェックしてもらおう(これがレベル)。そして、この実験で指摘されたもののうちレベルでもでもないものがレベルとなる。

### 4, 結果と分析

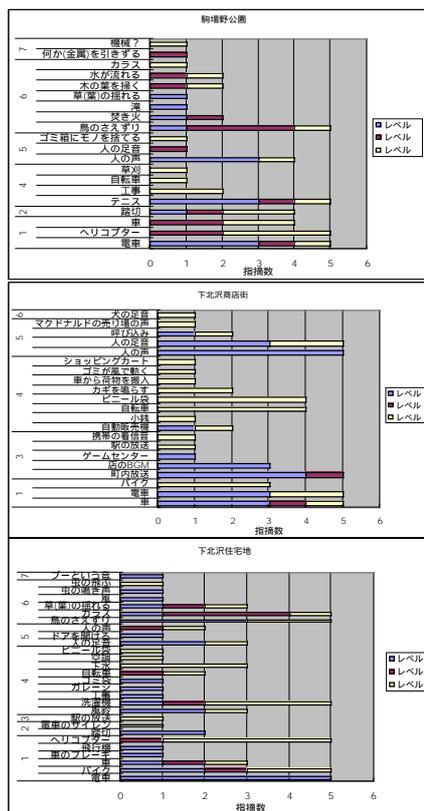


図1 音事象指摘数

表3 音事象類型

1	交通音
2	サイン音
3	メディア音
4	機械・器具音
5	人間音
6	自然音
7	不確定音

#### 4-1, 音事象指摘について(図1)

音事象の類型化の手法(表3)を用いて類型ごとに認識の度合いを考える。

- ・交通音: 3カ所ともに認識の度合いが高い。
- ・人間音: 交通音に次いで3カ所ともに高い。
- ・自然音: 公園と住宅地では高いが商店街ではほとんど認識されていない。住宅地と商店街では同じ下北沢で場所も近く、鳥のさえずりやカラスなどはどちらにも存在するはずのものなのに場所によって認識の度合いは、大きく変わっている。
- ・機械・器具音: 商店街、住宅地ではやや高めだが、公園では低い。
- ・サイン音: 指摘が少ないが、踏切の認識は公園、住宅地ともに高くなっている。
- ・メディア音: 商店街では少し認識されるが、その他の場所ではほとんど認識されていない。
- ・不確定音: 指摘もすくなく、ほぼ認識されていない。

またこれらの傾向とは別に、公園には機械・器具音のテニスの音、商店街にはメディア音である町内放送、店のBGM、住宅地では機械・器具音の風鈴、洗濯機の音といった特別高く認識しているその場特有の特徴的な音事象が存在している。これらの音事象は、その場所の音環境的特徴をある程度支配しているものだと見える。

#### 4-2, 音事象評価について

レベルの音事象に対しての記憶アンケートと記述調査における評価傾向の違い(図2)

- ・「活動的な-落ち着いた」: 全体的に、記憶アンケートから記述調査に移すにしたがって「活動的な」側に推移する傾向がある。
- ・「日常的な-非日常的な」: 全体的な傾向はないが、ある程度の推移の幅はある。また人間音に対しては、「非日常的」側に推移している。
- ・「静かな-うるさい」: 交通音が「うるさい」側に推移している。
- ・「こちよ-耳障りな」: 交通音が「耳障りな」側に推移し、人間音に対しては傾向はないが推移の幅はある。それ以外の音事象に対してはほとんど推移していない。
- ・「いい-よくない」: 交通音が「よくない」側に推移する傾向があるが、交通音でも車に対しては「いい」側に推移している。

音事象ごとに考えると、交通音のような騒音的な音事象は積極的に聞こえようとする事によって、「うるさい」「耳障りな」「よくない」というマイナス的な印象へと推移する傾向があることがわかる。

記述調査中での認識レベルごとの音事象に対する評価傾向

音の種類ごとに評価の平均をとった(図3)。機械・器具音は音事象ごとの差が激しく全体的な傾向をみることはできなかった。(「活動的な-落ち着いた」については「活動的な」と評価される傾向がある)また不確定音については、ほとんど指摘がないので考えない。

- ・交通音、サイン音、メディア音: 「うるさい」「耳障りな」「よくない」と評価されている。認識レベルごとではレベルで指摘されたものに強くその傾向が見られる。
- ・人間音: 「日常的な」「活動的な」と評価されている。認識レベルごとではレベルで一番強くその傾向が見られる。
- ・自然音: 「静かな」「こちよ」「いい」と評価されている。認識レベルごとではレベルでその傾向が一番弱くなっている。

これらの種類ごとの評価傾向は、おおむね既存の研究<sup>ii</sup>から予想されるものであったが、認識レベルごとの考察を通してさらに段階的な傾向を見ることができた。

#### 4-3, 音環境評価について(図4)

音環境全体については、個人差が大きく平均化しにくいところが多く、傾向は読みづらいが、記憶と記述において印象評価に違いがあることがわかる。もっと被験者数を増やし、平均化ができるようにすれば、記憶と記述による評価傾向の違いを見つけられると予想できる。

また、印象評価と認識レベルの関係を見ると、認識の高い音事象に対する印象評価が、音環境全体に対する評価に関係していることがわかる。例えば、機械・器具音を強く認識している商店街では、全体も「活動的な」と評価され、自然の音が強く認識されている公園や住宅地

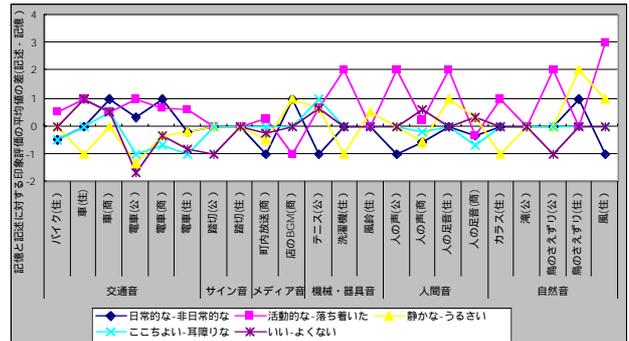


図2 記憶から記述に変わることでの印象評価の推移  
\*印象評価の得点化は、凡例において左側にある形容詞を5とすることでやっている

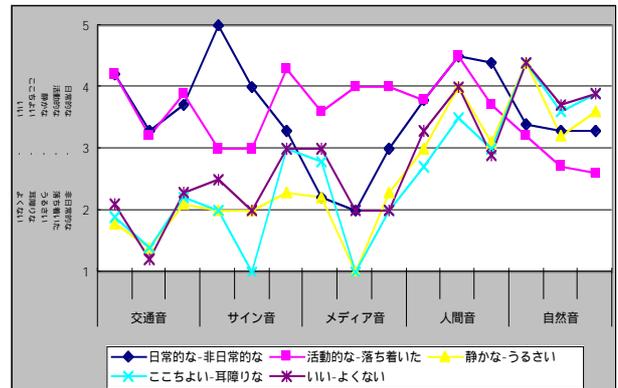


図3 音事象の認識レベル、類型ごとの印象評価

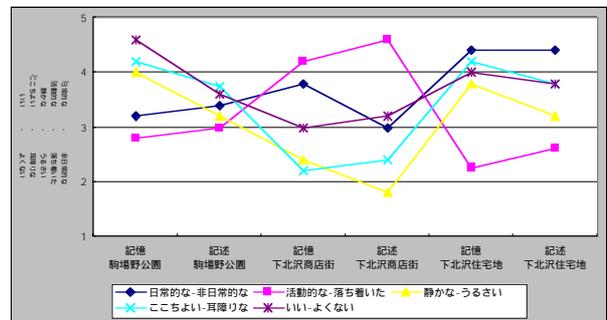


図4 音環境全体に対する印象評価(平均)

では、「静かな」「こちよ」「いい」と評価されている。

## 5, まとめ

分析の結果、音事象を耳にする際、その認識の度合いには違いがあり、またその度合いごとにそれぞれの音事象や、音環境全体に対する印象評価にも違いがあることがわかった。しかし本研究では、被験者数も対象場所も少なかったため、個人差がかなり出てしまった。より多くの被験者、対象場所で行えばよりはっきりとした違いや傾向を見つけられるであろう。

### 参考文献

<sup>i</sup>木村: 現代都市の具体的な音環境把握のための研究

<sup>ii</sup>川井: 音事象の種類および音量が音環境心理評価に与える影響